

大河ドラマ「麒麟がくる」のことばに関する小考

On Mino / Owari dialects observed in NHK drama “Kirin-ga kuru”

山 田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

戦国時代、美濃・尾張は、めまぐるしく領主が変わる地であり、歴史ドラマでも好んで描かれる舞台のひとつとなっている。2020年のNHK大河ドラマにおいては、池端俊策・前川洋一ほかの脚本による「麒麟がくる」が、前半、明智十兵衛光秀の故郷とされた美濃の地を中心に描かれ、その主君である斎藤道三の娘帰蝶の嫁ぎ先である織田信長との関連で尾張での様子も描かれた。

ことに大河ドラマにおいては、設定や衣装へのこだわりが前宣伝に用いられるなど、制作側の意気込みを感じさせることがあるが、ドラマ内で用いられることばにこだわったという脚本には出逢ったことがない。もちろん、台詞へのこだわりは脚本家にあるであろう。だが、それは伝えるべき内容としての言語であり、その媒体となる時代性・地域性を伴つことばへのこだわりではない。しかし、自然な疑問として投げかけられる問いは、「戦国時代・江戸時代にも、この辺の人はみやあみやあしゃべつとったんかな」ということである。この例の通り、ドラマで用いられたことばは、その時代の人々の使用していたことばのイメージを視聴者に植え付けるが、そこにはさほど頓着が見られない。

筆者のように近世語は門外漢であっても尋ねられることの多い上のような問い合わせに対する答えを準備しておくことは必要であるが、書きことばである書状は多く残るこの時代ではあっても、話しことばの資料はそれほど多くない。ましてや、この時代の濃尾方言を論じたまとまった考察は、管見の限り僅かである。このたび岐阜県図書館での公開講座「楽習会」^{がくしゅうかい}で話す必要に駆られ、少ない手がかりをもとに、短い考察をしたためることにしたが、あくまでも試論として問題点を整理したに過ぎない。大所高所の意見を仰ぎたい。

なお、「戦国時代」は、諸説あるが、定説に従い応仁の乱(1467)を始まりとし、終わりについては、江戸時代との連続性を考え、慶長8年(1603)に江戸幕府が成立するまでの間と考える。

2 ドラマで用いられる近世濃尾方言

今回の大河ドラマ「麒麟がくる」においては、次のような台詞が用いられている。

- (1) 菊丸：戦のさなかなのです。そんなところにお駒さんを連れて行きたくないです。
少しほは分かってください。
駒：どう分かれと言うの。いやなら一人で駿河へ帰ればよいでしょう。
菊丸：行かないとは言ってませんよ。(2020.5.10 「麒麟がくる」)
- (2) 明智光安：さきほど主立った家臣と話しあうたのじゃ。(略)
明智左馬助：私からもお願ひ致します。父の願いをお聞き届けてくださいませ。(同)
- (3) 明智光秀：みな、達者でおれよ。また会おう。また会おうぞ。(同)
- (4) 斎藤道三：(光秀に対して) ほめてつかわす。(2020.3.1 「麒麟がくる」)
- (5) 織田信長：松平の首を差し出して、わしは父上にほめてもらえると思うて (2020.3.15 「麒麟がくる」)

少しでも日本語の歴史を学んだことがあれば、(1)は言うまでもないことだが、これらの台詞が現代語である

ことはすぐに理解される。(1)は、「言ってませんよ」がイ抜きになっている上に、「さなか」のような近代になって現れる語句も用いられている。三河出身の農民という設定の架空の登場人物である菊丸と、京都出身の医者の助手との設定の駒が、このようなことばを話しているとは、だれも思わないであろう。この点はたやすく理解される。

しかし、(2)から(5)には、少し惑わされる。このドラマ内で美濃土着の武士として描かれる明智一族は、このようなことばで話していたのだろうか。「話しあうた」、「くださりませ」、「会おうぞ」、「ほめてつかわす」、「思うて」など、それらしいことばを使っているが、これらのすべてが当時のことばでないことは言うまでもない。紙幅の限られた小論であり包括的に論じることはできないが、いくつかの根拠を挙げて、発音、語彙、文法形式の面から、これらの「戦国時代のこの地域の武士やその他のことば」を考えていくのが本考察の目的である。

その前に、戦国時代の濃尾方言資料として、どのようなものから推察できるかを少しばかり考えておかなければならぬ。

3. 戦国時代の話しことば資料と当時の濃尾方言

戦国時代の話しことばを知る手がかりの第一は、いわゆる「抄物」と呼ばれる漢籍、仏書、漢文体の国書の注釈書であるが、ここから当時の日本語には文体の異なる言語が存在したことが垣間見える。また、キリストン宣教師が残した文献からも、当時の話しことばについて多くの特徴を知ることができる。江戸時代初期に J.ロドリゲスが記した『日本大文典(Arte da Lingoa de Iapam)』(1604-1608)は、この時代の日本語を詳細に知る重要な書籍であるし、イエズス会編の『日葡辞書(Vocabulario da Lingua do Japão)』(1603-1604)も、当時の語彙を知る重要な手がかりとなる。また、宣教師ハビアンが京都の話しことばによって訳した『天草本伊曾保物語』('Esopo no Fabvlas' 1593)もある。これは、「イソップ物語」をポルトガル語から室町末期の口語に訳し、ローマ字で表記、刊行した本であり、目的・性質からして、当時の話しことばの第一級史料となっている。

では、これらの資料から、当時の当地のことばをうかがい知ることはできるのであろうか。『日本大文典』には、東国についての記述はあるが、濃尾方言に関する記述は僅かしか見当たらない。尾張方言の代表とされる名古屋方言も、江戸時代以降に成立したことばである。芥子川(1971:4)は、「名古屋開府当時の言語資料は皆無であるので、当時の名古屋市民のことばがどんなものであったかを知ることはできない」と述べる。しかし、芥子川は、こうもつねげる。「年成立の経過はほとんど同じくする江戸ことばの成立を併せ考えることによって、当時の名古屋ことばのおおよそを推定することは可能である」(1971:4)とも指摘する。ただ、戦国時代の当地方言、とりわけ農民のことばへの言及はない。戦国時代の話しことば資料は、多く都であった京都のことばで書かれており、そこに 100km という距離を加えて考察することが可能なのであろうか。また、キリストン資料に断片的に残る記述から推察できることはどれだけあるのだろうか。

ここでは、大河ドラマのような歴史ドラマで描かれる戦国時代当地のことばについて、それがどのようなことばであったか、断片をつなぎ合わせて考えていきたい。

4. 戦国時代の当地の音声

4.1 音韻

専門家でなくとも少し日本語学をかじったことがあれば周知である事項から確認していこう。「天草版伊曾保物語(Esopo no Fabvlas)」(1593)の一節を引く。

Carasuto, fatono coto

Aru carasu totto coyeta fatou mite ycō vrayamaxū vomôte, ixibaiuo mini nutte, fatoni majitte yeuo curōta tocorode,

fajimeno fodoua fatomo carasutoua xiraide muragari ytaga, nochiniua coyede qiqixitte fatono nacauo voidaita.

Carasumomata sono iro sugatano ysōnauo mite, ychiruini xeide riōbō ni fanarete, dochiyemo tçucanu rōninni natta.

鳥と、鳩の事。

或る鳥とつて肥えた鳩を見て嚴う羨ましゅう思うて、石灰を身に塗って、鳩に交じて餌を食らうた所で、始めの程は鳩も鳥とは知らいで群がり居たが後には声で聞き知つて鳩の中を追い出いた。鳥も又その色姿の異相なを見て、一類にせいで両方に離れて、どちらへも付かぬ浪人に成った。

(483 ページ=国立国語研究所「天草版伊曾保物語」デジタル資料より。句読点は本文に合わせて変えた。)

内容からして、当時の話しことばで書かれたものと理解される。

ここからすぐに分かることは、①ハ行音は、少なくとも「ハ」と「ホ」がfで表される摩擦音であったであろうこと。②サ行音は、「ス」「ソ」の子音が「シ」「セ」と異なっており、前者はsで、後者はxで表されていること。③タ行音も「チ」は、当時も他の音と異なる子音をもちchiと表されていたこと。④「え」で表される音は、半母音を伴つたyeであり(タイトルの‘Esopo no Fabulas’は日本語の語順と格助詞「の」を含みながら単語はポルトガル語で書かれている点は興味深い)、「を」のみならず「お」で書かれたであろう音も半母音を伴つたwoで書かれていること。⑤二重子音(促音)、長音、撥音が存在したことなどである。③を除けば、現代語の発音とは大きく異なる。

なお、カ行音について、「カ」「コ」と「キ」が異なる表記(前者はc、後者はq)によって表されている。しかしこれは、ポルトガル語における口蓋化現象による表記のズレであって、日本語の音声の差を反映したものではない(ロドリゲスの『日本小文典』では、「ケ」と「キ」に対してkを、その他のカ行音についてはcを子音として用いている(岩波文庫版『同(上)』p.57))。し、母音単独の場合の「イ」「ウ」がy,vとなっていることも、語中の「ワ」「ヲ」がua,uoと書かれvが用いられていないことも、日本語の音声の違いを反映したものとは一般的に考えられない。

さて、これらの音声の歴史は、京都のものを中心に記述され大学でも教えられている。当時の他の地方の方言、とりわけ当地の方言については、次のような断片的な資料が残されているだけである。

○三河(Micaua)から日本の涯にいたるまでの東(Figaxi)の地方では、一般に物言ひが荒く、鋭くて、多くの音節を呑み込んで発音しない。(中略)

○Xe(シェ)の音節はささやくやうにSe(セ)、又はce(セ)に発音される。例へば、Xecai(世界)^{しえかい}の代りにCecai(セカリ)といひ、Saxeraruru(さしゃらるる)の代りにSaseraruru(させらるる)といふ。この発音をするので、‘関東’(Quantô)のものは甚だ有名である。 (土井忠生訳注『日本大文典』(1955:612-613))

「多くの音節を呑み込んで発音しない」ということは、母音の無声化が多く見られ促音が多く用いられているということと推察され、現在の東日本方言の音声的特徴と一致するものである。また、現代語では当然となっている「セ」の発音が関東では行われていたが、都では「シェ」が正しい発音であり、関東のものは「訛っている」からあえて記述したことである。

しかし、この断片的な記述から、子音が優勢な発音が三河ではされていても、その隣国の尾張では東日本的な特徴が見られなかつたと即断することはできない。現代の尾張でも美濃でも、「書留」「悪口」「自転車」などの2文字目の子音は「かきどめ」「わるぐち」「じでんしゃ」のように、有声音で発音されるのが伝統的には一般的である。これは京阪の特徴に通じるものである。しかし、江戸時代ほど移動に制限がなかつたことを考えれば、ここに記述される「三河」(これが「三河」のどこかにもよるが)と似たような特徴が尾張全般に見られなかつたとも言いきれない。そうでなければ、京阪ではウ音便となるワ行五段動詞(当時であればハ行四段動詞)が濃尾地方で促音便になることが説明できない。

また、続けて読めば、三河でも「セ」の発音があったと読めてしまう(そういう記述もときにはなされている)が、実際には、上記引用の2つの「○」の間には「べい」など文法形式に関する記述も含まれている。本当に、三河でこの「セ」が行われていたかは定かでない。しかし、そうだとしても、少なくとも「セ」の発音に関して

は、当時の美濃と尾張に「セ」はなかった音であり、文化的重心が関東に移った後に「シェ」から非口蓋化音に移ったと考えた方が妥当性が高くなる。

一般に音声的特徴は、生来的なものであり変化は生じにくいものである。少なくとも語彙ほどは変化しないことは、イベリア半島にローマ征服以前から存在した基層語の特徴がスペイン語（カスティーリャ語）に残っていることからもうかがい知れるし、イタリアでも古代ローマに吸収され消滅したエトルリア人の発音の特徴がトスカーナ方言の *ca* を軟口蓋摩擦音化させていることなどから明らかである。

4.2 アクセント

さて、アクセントはどうだっただろうか。現在でこそ、岐阜県の西端から垂井式アクセントが始まり、大垣市の西部を南北に流れる杭瀬川で内輪東京式に変わるとは言え、戦国時代にもそうであったという証拠にはならない。現代のアクセント変化を考えると、岐阜県内で同じ高校に通う垂井の青年層が、垂井式アクセントから大垣市で主流となっている内輪東京式へと移行することは、徐々に進行中であり、またこの100年でも東京で「鬼ヶ島」や「中学校」が頭高型から中高型へと変化したことなど、アクセントは意外と変わりやすい側面を有しているとも言える。

しかし、古く壬申の乱(672)以前にも古代の三閥である不破閥が置かれていたことから考えても、美濃西部に部族間の違いが大きな地帯が存在し、そこにアクセントの断層のようなものが存在していたことは容易に想像される。個別の類でなくアクセント体系として捉えた場合、現在の京阪式・東京式のような差はあったであろう。実際、『日本大文典』にも、アクセントの記述として、「五畿内の五力国」と越前、若狭、丹波、近江、播磨で、「訛り」のないアクセントが行われていた旨書かれている（土井訳『日本大文典』1955：622）。裏返せば、美濃以東は「訛り」のあるアクセント、つまり現在の東京式アクセントで話されていたことは間違いない。つまり、信長も光秀も、上洛すれば、（下手なアクセントで笑われながらも）京阪式アクセントを真似たかも知れないが、身内の武士との間では基本的に東京式アクセントで話したのであろう。この点は、歴史ドラマにまったく欠けた観点である。

4.3 連母音の融合

さて、共通語にはない現象である連母音の融合についてはどうであろうか。新村(1933：5)は、江戸時代初期の寛永年間(1624-1645)の沢庵禪師の言葉を紹介し、「伊勢の山田の者」や「但馬丹後の山家の者」などが、「かいて」を「キヤテ」と言うと述べている。沢庵禪師は、「大納言はダイナゴンと文字どほりに發音しては、あまり堅く聞こえるから、ダイでもなく、デヤでもなく、その中間を『すべらかして云ふ』べき」と主張する方言擁護派として紹介されているが、主張はともかく、このような連母音の融合が江戸初期、各所で起こっていたとの報告は貴重である。芥子川(1971：13)は、新村(1933)の記述を受け、「名古屋においても、この混在期に、これら連母音の音韻変化が尾張（名古屋）にも起っていたとみなければならない」とする。

しかし、各地で散発的に連母音の融合が生じているから当時の名古屋でもあったと結論づけることは、はたして適切なのだろうか。

筆者としては、戦国時代末当時、まだ名古屋方言に連母音の融合があったとは考えない。その根拠は次の通りである。まず、地域的に考えて、前述の連母音融合が、現代の濃尾方言の[æ]とは独立して起こった現象であることは間違いないであろうし、慶長年間(1596-1615)から始まった清洲越も一段落しすでに尾張徳川家のお膝元として発展の兆しを見せ始めていた名古屋で、連母音の融合があれば記述されていたであろう。直接の記述がないのである。また、柳田(2012：34)には、古代のような、母音連續が回避される（荒磯（あらいそ→ありそ）、高市（たかいち→たけち））ことがなくなり、母音だけで一音節を保つようになったが、その原因は、搔きて（か・き・て）→搔いて（か・い・て）のような音便によって生じた連母音の2音節保持にあると指摘する。また、このために、「海（かい）」など、すでに1音節化していた漢字語彙も2音節化したとの指摘がある。さらに、柳田(2012：60)

に、この時代の京都式アクセントでは、サ行イ音便によって生じた「カエイテ(返)」、「シメイテ(示)」などの連母音「えい」も長音化すらしなかったとの指摘があり、江戸時代の尾張方言資料でも、「ダイテ(出)」「ワラカイタ(寄)」などが（少なくとも上町では）融合せず表記されるている（芥子川 1971: 458, 589）。このことから、名古屋方言全体で連母音が融合したのは、江戸時代も後期になってからの現象と基本的には考えられよう。さらに、秀吉の書簡の分析が芥子川(1971: 18-9)に見られるが、そこには「さいさい(在々、いなか農村)」、「きあい(気合い、気分)」、「さいて(さして)」など、連母音の融合があれば何らか表記の工夫が試みられるであろう語が、そのままの語形で見られる。土井忠生訳註『日本大文典』(1955: 608)には、中国地方の発音の特徴として、「Narumai(なるまい)の代りに Narumā(なるまあ)といふ。」との記述があるが、当地の記述はないことも傍証として挙げられよう。多治見市や瀬戸市で今日も見られる連母音「アイ」→「ア一」の融合と同様の現象が当時にもあつたとすれば、信長や秀吉の時代に重宝された美濃焼や瀬戸物の産地である。この産地の記述がないのは奇異である。さらに、子音優勢であると記述される三河に隣接する尾張や美濃において、イ音便や「まじ」から「まい」への変化なども、西国に比して時間がかかるだろうし、この一形式に限らず連母音の融合の前提条件となる連母音が生じる可能性が低いと推察される。つまり、ドラマなどにおいて秀吉や、その家族などに「ミヤーミヤー」しゃべらせるることは、過大な演出であると考えられるのである。

このほかにも、詳細に検討はしなかつたが、有声閉鎖音の前に微弱な入り渡り鼻音も観察されたであろう。戦国時代の発音だけとっても、濃尾方言はアクセントを除き現代と大きく異なっていた。

5. 戦国時代の当地の語彙

植物や魚や昆虫を含めた小動物の呼び名などは、現在でも地方によるバリエーションが大きい。それは、その地で通じればよく、他所の同類の物と比較する必要がないからである。「めだか」などを、今でこそ全国規模の品評会で比較・評価することがあるかもしれないが、昔は徒歩圏内で生息する小魚がすべてであった。しかも大人がそれを呼称することもない。子どもだけが呼ぶものであれば、より地域を越えて広まっていくことはない。もしかしたら数年で呼び名が入れ替わるかもしれない。

ドラマで用いられることばは、全国的に理解されなければならないという点で、このような方言とは根本的に性質を異にする。現代語の方言語句であっても、テロップを出して理解を促したり、あるいは典型的な方言を繰り返し用いたりすることで、方言を演出しながらも理解の齟齬を生じないように配慮する（山田 2019 参照）。しかも、400 年以上前に現在と同じ語形が使われていた保証もないのに、現代語の方言を演出に用いるなどは、さすがに今回の「麒麟がくる」でも行われていない。この点はよい。

一方、現代共通語の語彙に関しては、時代を限ることなく用いられている。(1)で挙げた「戦(いくさ)」などは、戦国時代以前からあったことばであるが、「さなか」などは、明治時代以後に生じたことばであると、公立図書館にもある辞書（『日本国語大辞典』等）を見れば理解される。戦国時代になかったことばが使われる例は、枚挙に暇がない。そんな限定をおこなっていたら、役者に何も話せられない。

現実の濃尾方言の語彙は、どうであったであろうか。江戸時代も後半に入れば、方言語句についての記述も多く見られる。『物類称呼』(1775)に見られる美濃・尾張の語彙を挙げると次の通りである。

[美濃] 液雨(しぐれ)	(天地) : 山めぐり、旅人宿の下女(人倫=遊女の項) : もか、丁斑魚(うかれめ)	(動物) : こばい、鳳蝶(めだか)	あげはのてふ
(同) : かみなりてふ／＼、芋(うにくさ)	(生植) : ぼゞ、芋の茎(同) : だつ、白頭翁(ちごばな)	(同) : がくさう(飛蟬)にても	
のぐるひ又かつし[チ]き)、海金砂(うにくさ)	(同) : たゞきぐさ又いとかづら、山茶科(れうぶ)	のぐるひ又かつし[チ]き)、海金砂(うにくさ)	(度) : りやうぶ、柴(柴) (同) : そ
だ(美濃尾張にてはくぬ木にかきりてそだといふ)、菌茸(きのこ)	こけ、贅鼻茸(あぶらどし)	だ(美濃尾張にてはくぬ木にかきりてそだといふ)、菌茸(きのこ)	二布(ふたの)
の身に近く腰をふさぐ具也=贅鼻茸の項) : ゆぐ、羞明(まばゆし)	(衣食) : まはし、二布(ふたの)	の身に近く腰をふさぐ具也=贅鼻茸の項) : ゆぐ、羞明(まばゆし)	の身に近く腰をふさぐ具也=贅鼻茸の項) : ゆぐ、羞明(まばゆし)
[尾張] 虹(天地) : 鍋づる、妻(人倫) : お家、乳母(同) : まゝ、陰(同) : べゞ、鰯(ほら)	(同) : かゝはゆひ、月水(つきのさはり)	(同) : たや(たいのや)	(動物) : めうぎち、川魚(ほら)

(同) : 水魚、丁斑魚 (同) : うきす、籠馬 (同) : かまぎりす、綠豆 (生植) : ぶんどうあづき、蚕豆 (同) : のらまめ、酢漿草 (同) : すいもの草、鴨跖艸 (同) : ぼうしばな (機内あをばな、江戸つゆくさ)、苔 (同) : どちのかぐみ、浮蘆 (同) : 水なぎ、= (木偏 + 「備」の旁) 木 (同) : のでの木、榎 (同) : 山だんご、榤 (同) : きりかぶ、綿筒 (器用) : あめ、錢 (同) : 各出、多い (言語) : ふんだく (= ふんだん)、わざと (同) : 猛りわざ、ゆかず (「出る」の項) : 行んずる (※意志表現)、悪い (同) : をぞい、つかはせ (同) いこせ、日和の定まらぬ (同) : 一両日和、いつはり (同) : ちくらく・万八 (近年のはやりことば)、はなはだしき (同) : りうと・きうと、際 (同) : ねき、焦臭 (同) : こがれくさき、むさし 八道 (同) : 六道 (わらべの地上に大路小路の形を書いて錢を投てあらそひをなすたはふれ也)

(国立国語研究所『物類称呼』データベースから検索した結果)

現代にも通じる方言も多く見られる。江戸時代後期には、現代濃尾方言の基礎がしっかりと形成されていたことがうかがえる。しかし、それは、定住が進んだ時代が150年も続いた結果であり、乱世と呼ばれる時代に社会と同じで状況にあったわけではない。

江戸初期の語彙はどうであったのか。芥子川(1971:8-9)は、豊臣秀吉が書簡中に残したことばから、多くの「天正から慶長にかけての尾張のことばと見られるいくつかの単語やなまり」を書き出している。しかし、「しやわせ(幸せ)」や「せんかく(せっかく)」など、秀吉特有の書き間違いの可能性も否定できない音訛も多く、語彙的にも今日の濃尾方言に通じる語句は、「かわいい(気の毒)」、「よさ(夜)」、「ひとねる(成長する)」、「かママいき(風邪)」程度であり、サ行イ音便の「さいて」を含めても、僅かである。また、尾張藩士津田藤兵衛の隨筆「正事記」(1665)の俗言として挙がるなかに、「からげる(くくる)」、「いきり(蒸し暑いこと)」、「やけずり(やけど)」なども見られるが、これらは、本当に尾張方言なのであろうか。「ひとねる」は『明応本節用集』(1496)などにも見られ、「かわいそう」の意味の「かわいい」などは、古典の授業で習うように平安時代の必修語である。「いきる」や「がいき」、「ようさり」も同様に平安時代から見られる語である。「からげる」に至っては、現代でも共通語であり、当時の濃尾方言とは考えられない。つまり、現在、濃尾方言になっているからといって、その当時も濃尾に限定された方言であったわけではない。京阪で用いられた語でその当時名古屋で用いられたとしても、名古屋方言と呼べるかについては、現在の首都である東京と同じことばを他所で用いていてそれを方言と呼ぶかを考えてみればわかる。それは共通語であって方言ではない。結局、戦国から江戸初期にかけての純粋な濃尾特有の方言語句は、ほとんど見つけられないである。

その理由は簡単である。名古屋という町は、江戸時代になってからできた町である。その町が独自の文化を育んで独自のことばを花開かせていくには少しく時間がかかったからである。彦坂(1990:141)は、近世尾張方言の敬語を分析する中で、江戸時代後期の尾張方言は、「上方語・江戸語に比べてやや古態的な点を指摘できよう」と述べている。これは、江戸後期であっても、独自にことばを変化させる力、換言すれば文化の蓄積が薄いことを示している。ことばが変化するには、都市文化の厚みが必要なのである。であれば、戦国時代の当地に独自の方言を醸成するだけの都市文化は認めがたく、あっても動植物の名称に留まり、抽象的概念を表す語句にまで広まることはない。現代でも当地方言に古語の残滓が多く確認されることから言っても、その源流が当地にあるわけではない。つまり、戦国時代に当地に、現代に伝わるような方言語彙が多く存在したとは考えられにくいのである。この点では、歴史ドラマの語彙は適切に用いられていると言えようか。

6. 戦国時代の当地の文法

6.1 形容詞連用形のウ音便

現在の岐阜市北部で修行を積んだ安樂庵策伝(1554-1642)は、落語の祖としても知られ、笑い話を集めた『醒睡笑』(1623年あるいは1628年成立)をしたためている。策伝は晩年、京都に住み、同書も京都で編纂された史料であり、必ずしも美濃のことばを反映しているとは言えないが、中に次のような話が見られる。

作為ある人の飼ふ犬あり。名を二十四とつけたり。「二十四、二十四」と呼べば来る。「なにとした子細にや」と問ふ。「しろく候へば」。さて、「実にも實にも」と感じ家に帰り、白犬をもとめ、二十四と呼ぶ。「いかなる心持ちぞ」と尋ねられ、「しろう候へば」。

(岩波文庫版『醒睡笑』「文字知り顔（巻之三） 七 白くは二十四」)

まず、2つの語形「しろく」と「しろう」が同一社会に存在していることが描かれている点に注意しなければならない。現代でも複数の文体を用いることがある。関西の芸人が共通語も操るという方言に関する切り替えもあれば、普段はら抜きで話している学生が就職の面接では一段動詞の可能形に「ら」を入れて「教えられます」のように言うような場面による切り替えもある。しかし、この噺の主人公は、「しろく」を理解語、「しろう」を使用語として使い分けているのであり、一人の人の中に切り替え可能な言語として存在していたのではない可能性もある。

では、異なる文体で話す人間が、社会の中で接点をもっていたとするとどうであろうか。現代の落語と同じで、下手に真似することで失敗する話の構造は、「看板のピン」をはじめとしてよくある型である。ただ、その場合、真似される方はより賢く上品に描かれるが、真似する方はどこか抜けっていて時に劣った人物として描かれる。であれば、「白く」を「しろく」と呼ぶのは崩れていらない正しい語形であり、ウ音便形の「しろう」は崩れた語形と捉えることができる。つまり、「作為ある人」と噺の主人公とは、ことばの違うそれぞれの位相に所属していたと考えられるのである。それは、「しろく」という現代の方言差から三河地方以東の出身であるということではなく、音便形のような崩れていらない形を使用する階層があつたということなのか。この鍵は、次の二話にある。

^{あづま} 東の奥より都にのぼりたる人あり。さる古寺に立ち寄り院主に参会し、物語など時過ぎけるまゝ、菓子持ち出でて小姓を呼び、「いかにもお茶をもみぢにたてよ」とありしを、客、「なにたる仔細にや」と問ふ。「ただこうようにといふ事なり」と。「あな、おもしろの事の葉や」と覚えつつ、本国に帰り、わざと近付きの友をよび振舞ひ、かねてより小姓にいひをへ、「お茶をもみぢにたて申せ」とあり。人々、「さすがにこの度上洛のしるしあり」と感じ、事のおもむきを伺ひたれば、「こくよくたて申せという事だよ」と。あながちその人のとがにはあらず、物毎ただ國の風による。

(岩波文庫版『醒睡笑』「人はそだち（巻之五） 一 紅葉は濃うよう」)

「こうよう（紅葉）」を「濃くよく」の音便と捉え「もみぢ（もみじ）」と掛けたものであるが、「白い犬」と同じことばの差を笑い話したものである。この「東の奥」（どこかは明確ではない）では、形容詞の連用形に音便形が用いられていないことを示していると同時に、都で聞かれる形容詞連用形のウ音便を低くは捉えていない（指定辞の「だ」も最後から2文目に用いられているなど、この江戸時代の初期にすでに東西で異なって用いられていたことも示されている）。ここでは、非音便形を用いる人物が、東国出身と言しながらも、「とが」などと言えるものが原因でそのような言葉遣いをしているわけではないと擁護している点も興味深い。ともあれ、徳川の時代、京都はダイグロシア状態であり東国方言も多く聞かれ、その尊卑はあえて問われなかつたということであろう。

では、当地の方言はどうであったであろうか。『日本大文典』には、三河国以東で形容詞のウ音便が聞かれなかつたことを記述する項目がある。

○Ay (アい)、Ey (エい)、Iy (イイ)、Oy (オい)、Vy (ウい) に終る形容動詞において、Yô (良う)、Amô (甘う)、Nurû (緩う) などの如く、ô (オう)、ô (アう)、û (ウう) に終る語根の代りに、Xiroqu (白く)、Nagaqu (長く)、Mijicaqu (短く) などの如く書き言葉のQu (く) に終る形を用ゐる。

(土井忠生訳注『日本大文典』(1955 : 612-613))

この記述から美濃及び尾張地方では、当時形容詞連用形のウ音便があったことは明白である。また、『醒睡笑』が、作者安楽庵策伝が序において「小僧の時より、耳にふれておもしろくをかしかりつる事を、反故の端ことめ置きたり」と述べるよう、美濃にいた頃からの作品を集めたものであることから考えると、少なくとも美濃には、音便形があったか併用されていた可能性は高い。『方言文法全国地図』(1991)で、三河中央の矢作川付近にあると記述された音便使用の等語線は、文法形式であるということから考えると、江戸時代におそらく東進したであろう(ただし、『方言文法全国地図』と『新日本言語地図』の40年という時差では、逆に、この等語線が一部西進し、愛知県で広くウ音便でない形が用いられている点は興味深い)。

なお、動詞については、ワ行四段動詞のウ音便が頻用されるほかに、マ行四段動詞の「済む」が「済うだ」となる(卷之三「文字知り顔」19「跳ねたで勝った」など)など、音便が多く見られる。一方で、カ行四段動詞は、音便にならない例も見られる(卷之三「不文字」16「宛名は新のく」)など、この時代、まだ動詞の音便形が不安定な状況であったことがうかがい知れる。

6.2 指定辞

指定辞については、江戸時代後期になっても、美濃では「ジャ」であったことが知られる一方、名古屋では独特な音であったとの記述がされる。

○助語 {ぢよご} [ことばのをはりにつくことなり] (中略) 美濃にて『ヂヤ (*「ヂヤ」に傍線)』
『物類称呼』越谷吾山(1775)

「名古屋言葉のデヤは江戸のダ上方のジヤといふにひとし。デヤとははなしてよむべからず、
デヤと続いてよむべし。」とする 『四編の綴足』 東花元成(江戸出身) (文化元年=1804)

すでに、『硯縮涼鼓集』(1695)から一世紀近く経ったこの記述は、「ヂヤ」は「ジャ」と同音であったと読めばよいであろう。名古屋の「デヤ」は、芥子川(1971:13)に、宝永年間(1704-1711)に天野景信の記述によって「デア」があつたことを指摘するが、一方で同(1971:85)では、「尾張、美濃地域にこれが『でや』の形で江戸時代から明治に至るまで存続した」と書いている。現在は、「ヤ」となっている美濃で、江戸時代中期に尾張と同じ「デア」から半母音が挿入され「ヂヤ」となったとすれば、その後に、美濃では京阪風の「ジャ」が西から入り込み、木曽川で尾張と袂を分かつことになる。この点にはいさか疑問の余地が残る。また、芥子川(1971:129-130)は、19世紀初頭の名古屋資料から、名古屋では「ジャ」と「ダ」の混在状態であったことを指摘する。大都市は必ずしも土着住民ばかりではなかったであろうから、東西両方から影響を受けた状態が長く続いてきたことが示唆される。資料の性質から江戸時代後期に話がされたが、戦国時代、濃尾地域は「である」の下略形「であ」が長く古態として存在した土地であったと推察される。

6.3 意志形

もうひとつ、『日本大文典』に指摘されていることを挙げておく。

○‘尾張’(Vouari)から‘関東’(Quantô)にかけては、Anzu(アンズ)、又はenzu(エンズ)に終る書き言葉の未来形を盛に使ふ。例へば、Agenzu(上げんズ)、Xenzu(せんズ) Quicanzu(聞かんズ)、Mairanzu(参らんズ)、Narauanzu(習はんズ)などはAgueôzu(上げうズ)、Xôzu(せうズ)、Quicôzu(聞かうズ)、Mairôzu(参らうズ)、Narauôzu(習はうズ)の代りである。 (土井忠生訳注『日本大文典』(1955:613))

この「未来形」とは、意志動詞に続く意志形と捉えられるが、これは、明確に尾張以東で「～ズ」の形が用い

られていたと記述されている。『方言文法全国地図』第5集第232図によれば、この表現は静岡・長野以西に見られ、三河には「ズ」の落ちた「行カ一」の形が見られるが、尾張にはない形である。もちろん、「聞かうず」が「キコーズ」であり、その「ズ」が落ちれば「キコ一」であるから現代共通語にも通じる形であるが、ややこしいので未然形本来のア段に限れば、同様の例は『方言文法全国地図』第5集第232図に、東濃の「イカス」として拾われている。少し古い岐阜方言で、反語の「行くだろうか、いや行かない」の意味で「イカスカ」が使われていたことから考えれば、この『日本大文典』の記述は、美濃にも当てはまることと推察される。すなわち、明智光秀は(3)のように述べるとき、「アオーズ」と言っていた可能性が高いのである。

ほかに、「～てもらえる」や「～てつかわす」など、恩恵を表す補助動詞も、江戸時代になってからの表現であろう。このように、断片的な記述からしても、当時の当地方言とは異なることばが、明智光秀の出身地とされた美濃のことばとして使われている。それが歴史ドラマである。

7. まとめ

この時代、多くの古文書が残る。しかし、古文書のことばは書きことばである。一例として、織田信長の書状を引用してみれば、次のようなもの。

「青葉之笛持せ／被越候 名物ニ候／前々誰之所持候て、／何とある子細に／依て竹生島へ／寄進候哉 小笛／添候 是も定／子細可有之候／能々相尋候て／ 存知之躰を／具書付候て、可／被越候、恐々謹言// 九月六日 信長（花押）／磯野丹波守殿」

「竹生島の名物青葉の笛を見た。誰がどのような理由で竹生島に寄進したものか、また、これに添えられる小笛も由来があるようである。これらのことについて調査して知らせるように」

（滋賀県信楽市 MIHO MUSEUM <http://www.miho.or.jp/booth/html/artcon/00001957.htm> より）

この通り話していたとは考えられない。現代でも手紙に書くことばは、必ずしも話すことばと同じではない。話すことばは、別に考えられなければならないが、音声が記録できるようになってたかだか150年ほどしか経っていない。話すことばの歴史は、依然として不明な点が多い。

武士は、実際、どのように話していたのか。『醒睡笑』に見られる武士のことば（下線部）は、次のようなもの。

武士たる人、ある神主にむかひ、「そちは神道を心得たるや」。「いな、白張着たるまでに候」。「いたはしや、本来無東西、何処を南北といふ大事をも知らいで」と笑はれければ、神主、「私は仏歌、神歌、道歌を、ぶつかん、じんかん、道かんにて理をすまし参らする」と申す時、かの武士、「それはふかいこと、おもしろさうな」と感ぜられたるにて済うだ。

（岩波文庫版『醒睡笑』「文字知り顔（巻之三） 一九 跳ねたで勝った」）

やはり上に引いた書状の言葉遣いとは大きく変わっているが、この『醒睡笑』の話し方が当時の常であったとすれば、やはり歴史ドラマの日本語とは大きく異なっていることに気づく。この考察は、最初から答えが見えていて、考察にもなっていないと言われるかもしれないが、ドラマの戦国武士・農民のことばは、それ自体が金水（2005他）で言われる役割語である。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を想起されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべる事ができるとき、その

言葉づかいで「役割語」と呼ぶ。

(金水 2003:205)

大河ドラマは、武士語という役割語をもっともらしく散らばしていかにも武士風に語っているだけのものである。文法はともかく、近代以降の語彙を排除し発音を当時のようにしたら、現代人にはほとんど通じないであろう。意外とそのようなことは、視聴者に勘違いされている。

特に今回の「麒麟がくる」では、衣装のデザインが、およそ当時あったであろうとは信じられないほど鮮やかで大胆な意匠を配したものであったことを理解してもらえば、このような論は自明であったかもしれない。それほど、ドラマのことばは、現実のものではないのである。それは、朝の連続テレビ小説でも同じである。主人公の妻の音が「(感動で)鳥肌まで立っちゃった。」という場面があった(2020.5.22 NHK 朝の連続テレビ小説「エール」)が、「鳥肌」は恐怖によって立つものであることは、『明鏡国語辞典』に「近年『感動で[あまりのうれしさに]が立つ』などいい意味で使うのは本来的ではない。」との記述があるなど、現代を生きる人間の間でも使用に差がある表現である。若者にも視聴してほしくて新しい表現を入れたのか、あるいは、多くの年配視聴者に違和感を与えることを知らずに入れてしまったのかはわからないが、いずれにしても、時代劇であれ現代劇であれ、ドラマにその時代の正しいことばを求めてもしかたがないのである。ただ、その一方で、武具や建物等の時代考証には力を入れる。目に見える物には費用をかけてことばは軽んじるのでは、せっかくの大河ドラマももったいない。徹底すれば理解不能なことばにもなりかねないが、せめて当時の方言を登場人物に話させるのであれば、ことばの時代考証にも、多少の気配りをしてほしいものである。

付記 本研究は、科学研究費補助金基盤研究(A)『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開(代表: 日高水穂(関西大学)・課題番号: 20H00015)の研究成果の一部である。

参考文献

- 大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図 – 分布図で見渡す方言の世界 –』朝倉書店
芥子川律治(1971)『名古屋方言の研究』名古屋泰文堂
金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
国立国語研究所(1993)『方言文法全国地図第3集-活用編2-』国立国語研究所
国立国語研究所(2002)『方言文法全国地図第5集-表現法編2-』国立国語研究所
新村出(1933)『方言覺書』『方言』4-1、春陽堂
野村剛史(2011)『話し言葉の日本史』吉川弘文館
彦坂佳宣(1990)「近世尾張方言における敬語の性格をめぐって – 中央語との対照から –」『立命館文学』515
柳田征司(1985)『室町時代の国語』東京堂書店
柳田征司(2012)『日本語の歴史3 中世口語資料を読む』武藏野書院
山田敏弘(2019)「『半分、青い。』の岐阜東濃方言」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』67-2

(令和3年1月4日受理)